

メディア文化論⑦若者はなぜポピュラー音楽が好きなのか？

—（その7）Jポップの創作者たちは若者か？—

水野博介*

<目次>

- 1 仮説と問題意識
- 2 検証方法
 - (1) データベース
 - (2) 「創作者」についての情報
 - (3) 時代背景等
- 3 Jポップ成立前夜
- 4 Jポップの成立以降
- 5 20世紀末～21世紀初頭
- 6 結語

1 仮説と問題意識

前々稿および前稿に引き続き、ここでも、一連の論考の最初に挙げた諸仮説（水野 2008 年）のうち、

⑥音楽を創造する側も若者が多く、その作品は若者の共感を得て、支持されるを取りあげる。

前々稿では、日本における検証を流行歌の初期の頃の創作者たちについて行い、前稿では、太平洋戦争後の日本のポピュラー音楽シーンのなかでのヒット曲が、どのような人々によって創作されたかを見た。しかし、そこでは、1970年代末くらいまでの時期しか扱うことができなかった。そこで、本稿は、その後の「ニューミ

ュージック」ないしは「J ポップ」（正確には「J-POP」かもしれないが、他の著作に従い、ここでは「J ポップ」と表記する）の発展期である 1980 年代以降今日までの状況に関して論じることとする。

2 検証方法

(1) データベース

ここでは、1980 年代末から今日に至るまで、日本のポピュラー音楽（「演歌」を除く）についての総称的な用語であった「J ポップ」を含めて、広く流行歌を扱っている通史的な本を繙き、そこに出てくる「創作者」、つまり「作詞家」「作曲家」および「歌手（歌唱担当）」の活躍年代と主な作品の発表年代（より厳密には制作年代であるべきだが、発表年代で代替する）を調べる。各年代における「ヒット曲」を網羅するという点に焦点を合わせた本を一種の「データベース」として利用する、ということである。

本稿では、年代順に「ヒット曲」を拾いあげている菊池清麿『日本流行歌変遷史 歌謡曲の誕生から J・ポップの時代へ』論創社（2008 年）を主たるデータベースとし、楽曲の記述が欠けている年などについては、烏賀陽弘道『J ポップとは何か——巨大化する音楽産業——』岩波書店（2005 年）に記載されている楽曲名およびその創作者たちのリストを補足的な「データベース」として利用する（なお、利用してわかったが、菊池の記述しているデータはいささか正確さを欠いていることがあり、その場合にも適宜別な文献で補った）。

* みずの・ひろすけ
埼玉大学教養学部教授、メディア論

菊池の本は「歌謡曲の成立から90年代のJ・ポップの時代に至る日本の流行歌の豊富な歴史を跡づけている」(3頁)のものであり、本稿では、「II-7 1980年代——ニューミュージックと歌謡曲」(255-265頁)と実質的な最終章である「VII J ポップの成立」(268-299頁)を参照する。そこでは、世相やブームなどを追いつつ、ヒットした楽曲が列挙され、楽曲の歌手・作詞・作曲者についても記されている(ただし、演歌についても記されているが、演歌の楽曲についてはここでの分析の対象外とする)。

烏賀陽の本は、「本書の目的は、水を酸素原子と水素原子に分解するように、「J ポップ」という現象を構成している要素を分解し、ひとつひとつ提示することである」(iii頁)と述べているように、J ポップを「デジタル化」「テレビ」「聴き手」および「日本という音楽市場」という観点から分析している。

ここで参照する以上二冊の本において、創作者たちが「若者」であるような楽曲を特に意図して選択して記載されているようなことはない。したがって、本稿の仮説を検証するための一種の「データベース」として用いることに差支えはないように思われる。

(2) 「創作者」についての情報

本稿では、前々稿および前稿と同様に、「創作者」として「作詞家」「作曲家」および「歌手」を扱う。ここでは、基本的に、それらの「創作者」が何歳のときに、それらの作品が発表されたかという「年齢」を見ていくことにする。したがって、前々稿および前稿と同様に、それらの「創作者」の「生年月日」は記すが、「没年月日」は記さないことにする。

創作者たちの「生年月日」に関しては、主に、オリコン株式会社(Oricon Inc.)のポータルサイトORICON STYLE(オリコンスタイル)に

ある『オリコン芸能人辞典』における個々の芸能人の「プロフィール」に記載されているものを用いた。ただし、その情報は、『日本タレント名鑑』(VIP タイムス社)の引用であるようだ。また、この辞典に載っていない作詞家・作曲家は多い(載っていてもプロフィールがない場合もある)ので、その場合、各創作者の公式サイト等がある場合はそこに記されたプロフィールを参照(例えば、作曲家の松岡直也や鈴木キサブローの場合)し、それも存在しないようであれば(作詞家の阿木耀子や伊達歩=伊集院静のように公式サイトに生年月日が不記載の場合もある)、ネットのWikipediaを利用した。これは、前々稿・前稿でも用いたが、生年月日の情報については一応信頼できるのではないかと思う。

(3) 時代背景等

また、これも前稿と同様だが、それらの作品がどのような時代背景にあって作られ、どのような内容のものであるかも、ある程度おさえた上で、発表当時の若者にどれほど共感と支持を得たかを関係者の証言等によって確認する。

以下では、基本的に、「J ポップ」という言葉が生まれた頃、つまり、元号が「昭和」から「平成」に移った1980年代末の少し前から、「データベース」として選んだ上記の二冊の著書が扱っている2000年頃までの期間における楽曲を検討対象としている。

3 J ポップ成立前夜

後でも述べるが、「J ポップ成立」を1980年代末とすると、その前の10年ほどは、J ポップ成立に至る“前夜”であり、J ポップを生み出したと言える諸要因が出現した時期だと言える。

そのなかでも、菊池と烏賀陽が共に挙げてい

る要因として、楽曲の「デジタル化」、より具体的な形としては「CD」の登場（1982＝昭和57年秋）が重要である。菊池は、「CDの発売によって、音楽産業の地盤変化、つまり、システム変化が見られた」（菊池前掲書、271頁）と言う。つまり、「楽曲制作の場が、既存のレコード会社、芸能プロ、音楽出版社〔や〕放送局の枠外に生まれた」（同）わけである。

菊池の論理としては、「CDというコンパクトなパッケージ時代が、逆にライブという「生の世界」にコンサートの大規模化とイベント的なエンターテインメントの要素を重要視させ」（菊池同書、272頁）、その結果として「コンサート新時代の担い手は、自作自演のシンガーソングライター」（菊池同書、273頁）ということになるが、それも比較的小さなライブハウスなどで活躍するインディーズのシンガーが主体となる（同）。ちなみに、自作自演の歌手として、よりメジャーな存在としては、すでに80年代の松任谷由実がいて、「演奏ツアーで大規模な装置を組み、パフォーマンスの総合性を売り物にしていた」（菊池同書、272頁）。

CDの出現は、菊池が述べるように、レコードよりはるかに取り扱いの容易な音源の出現ではあるが、それとコンサートの興隆とのつながりは、むしろ、CDが人間の可聴範囲の音以外の上下の周波数部分をカットしてしまったところに求められるのかもしれない。レコードは可聴範囲以外の音も録音しており、その部分は（耳に音として聞こえていなくても）体感されていたとも言える（特にステレオやスピーカーなどの装置によって増幅されていた）のに対して、CDはより簡易な装置での再生ということとも相俟って、いわゆる“豊かな”音の享受という点では（無意識かもしれないが）物足りない状況をもたらしたのであろう。それが、コンサートの隆盛をもたらしたと考えられる。

ただ、松任谷由実の頃は「Jポップ」とは言わず、「ニューミュージック」と呼んでいたのであるが、音楽的な特質等で、実質的に違いがあるとは言えないであろう。「ニューミュージック」は「歌謡曲」の一部にすぎなかったのが、「Jポップ」という呼称の登場によって、ポップスのものがすべて包括されるようになり、ニューミュージックもそこへ移ったのであり、その分、「歌謡曲」という言い方はすたれ、ポップス以外は「演歌」と同様なものとされるようになったというだけである。

そこで、ここでは、まず「ニューミュージック」が全盛だった1980年代をみていく（80年代の初め頃にはまだCDはない）。この「80年代は、日本流行歌史のなかで大きな転換期だった」（菊池同書、256頁）という。80年代は、広い意味で「アイドル歌手の時代」であった。菊池が最初に取り上げているのはGSの「タイガース時代からのアイドル・沢田研二が1980（昭和55）年に電子音楽を使って」（菊池同書、258頁）ヒットさせた次の楽曲である。

①「TOKIO」

（レコードの発売1980＝昭和55年1月）

作詞：糸井重里

（1948＝昭和23年11月10日生）

当時 31 歳

[以下、「当時」は省略する]

作曲：加瀬邦彦

（1941＝昭和16年3月6日生）

38 歳

歌唱：沢田研二

（1948＝昭和23年6月25日生）

31 歳

創作者の3名はいずれも30代であって、決して若くはなかったし、楽曲自体（「TOKIOが空を飛ぶ・・・」）も、若者の心情を歌うような内容ではなかった。

1980年代は、菊池も述べているように、フレッシュな若いアイドル全盛の時代であった。以下、菊池の記述に従って、当時のアイドルの楽曲をたどっていく。まず、2012年の現在もなお「アイドル」の地位を保っているとも言うべき松田聖子の楽曲が4曲続く（菊池同書、258-9頁）。

②「青い珊瑚礁」

（レコード発売 1980=昭和 55 年 7 月）

作詞：三浦徳子 [ヨシコ]（生年月日不明）

作曲：小田裕一郎

（1950=昭和 25 年 3 月 25 日生） 30 歳

歌唱：松田聖子

（1962=昭和 37 年 3 月 10 日生） 18 歳

③「夏の扉」

（レコード発売 1981=昭和 56 年 4 月）

作詞：三浦徳子 [ヨシコ]（生年月日不明）

作曲：財津和夫

（1948=昭和 23 年 2 月 19 日生） 33 歳

歌唱：松田聖子

（1962=昭和 37 年 3 月 10 日生） 19 歳

④「白いパラソル」

（レコード発売 1981=昭和 56 年 7 月）

作詞：松本 隆

（1949=昭和 24 年 7 月 16 日生） 32 歳

作曲：財津和夫

（1948=昭和 23 年 2 月 19 日生） 33 歳

歌唱：松田聖子

（1962=昭和 37 年 3 月 10 日生） 19 歳

⑤「赤いスイートピー」

（レコード発売 1982=昭和 57 年 8 月）

作詞：松本 隆

（1949=昭和 24 年 7 月 16 日生） 33 歳

作曲：呉田軽穂 [=松任谷由実]

（1954=昭和 29 年 1 月 19 日生） 28 歳

歌唱：松田聖子

（1962=昭和 37 年 3 月 10 日生） 20 歳

以上の②～⑤の4曲は、作詞・作曲ともに30歳前後（生年月日不明の三浦徳子も経歴から推定するとそれくらい）であり、“とても若い”というふうには言えない。そのような創作者たちの楽曲を18～20歳だった若い松田聖子が歌い、10代～20代の若いファンが熱狂したわけである。

当時の「アイドル」として、松田聖子以上に人気のあった「ツッパリ」系アイドル歌手（菊池同書、259頁）の中森明菜は、2年連続でレコード大賞を受賞した（菊池同書、260頁）。それらの楽曲の創作者たちをみておく。

⑥「ミ・アモーレ」

（レコード発売 1985=昭和 60 年 3 月）

作詞：康 珍化 [カン チンファ]

（1953=昭和 24 年 6 月 24 日生） 31 歳

作曲：松岡直也

（1937=昭和 12 年 5 月 9 日生） 47 歳

歌唱：中森明菜

（1965=昭和 40 年 7 月 13 日生） 19 歳

⑦「DESIRE」

（レコード発売 1986=昭和 61 年 2 月）

作詞：阿木耀子

（1945=昭和 20 年 5 月 1 日生） 40 歳

作曲：鈴木キサブロー

（1953=昭和 28 年 2 月 14 日生） 33 歳

歌唱：中森明菜

（1965=昭和 40 年 7 月 13 日生） 20 歳

以上の⑥と⑦の2曲は、作詞・作曲ともに30

～40歳代の中年コンビによる作品であった。

菊池の著書には、当時人気だった男性アイドルの楽曲も紹介してある。近藤真彦（愛称・マッチ）のレコード大賞受賞曲と、光 GENJI という男性グループの、同じくレコード大賞受賞曲である。なお、光 GENJI については、グループなので、歌唱は中心的なメンバーであった諸星和己（愛称・かーくん）について見てみる。

⑧ 「愚か者」

（レコード発売 1987＝昭和 62 年 2 月）

作詞：伊達 歩 [=伊集院静]

（1950＝昭和 25 年 2 月 9 日生） 37 歳

作曲：井上堯之

（1941＝昭和 16 年 3 月 15 日生） 45 歳

歌唱：近藤真彦

（1964＝昭和 39 年 7 月 19 日生） 22 歳

⑨ 「パラダイス銀河」

（レコード発売 1987＝昭和 62 年 2 月）

作詞・作曲：飛鳥 涼

（1958＝昭和 33 年 2 月 24 日生） 29 歳

歌唱：光 GENJI

センター・諸星 [モモ] 和己

（1970＝昭和 45 年 8 月 12 日生） 16 歳

以上の⑧と⑨においても、10代後半～20代前半の若いアイドルに楽曲を提供した作詞・作曲家は必ずしも“若い”とは言えないであろう。

4 J ポップの成立以降

「J ポップ」という呼称について、菊池清麻呂は、単に「1988（昭和 63）年が J・ポップの元年である」（菊池前掲書、274 頁）と記しているだけで、その呼称の由来については述べていない。

ジャーナリスト鳥賀陽弘道は、FM 東京の開局（1970 年）以来久々に誕生した東京の民放 FM ラジオ局 J-WAVE（1988 年開局）において発足した、あるコーナーの名称に由来している（鳥賀陽前掲書、第 1 章）。

それによると、J-WAVE は“洋楽しか流さない”日本のラジオを標榜していたのであるが、「そんな J-WAVE で邦楽をかけるコーナーを発足させよう。洋楽しかかからない局で邦楽がかかれば、音楽をよく知っている人たちのおめがねにかなった、というイメージがついてかっこいいじゃないか」（同書、6 頁）というようなレコード会社側の狙いと、“J-WAVE で邦楽がかかる”という「貴重性」を出したいというラジオ局側のもくろみがあって、そのコーナーが発案された（同）。両者が協議を行うなかで、「そのコーナーにどんな名前を付けるのか。英語の語りの中で「日本のポップス」をどう呼ぶのか」（同書、7 頁）が話題になり、誰かが言った「ジャパン・ポップスにしてもジャパニーズ・ポップスにして [も] 「J」は同じなんだから「J ポップ」でいいんじゃない？短い方がいいよ。ラジオで言いやすいし。第一、ここは J-WAVE だし」（同）という発言から、「J ポップ」という言葉が生まれたという。そのような協議がなされたのは、「88 年末か 89 年初頭のことだ」（同）とされる。

1980 年代から 90 年代にかけては「J」のつく企業や活動が流行った時期である。例えば、かつて政府機関として存在していた「三公社」のうち、国鉄（日本国有鉄道）は民営化（1987＝昭和 62 年）されて「JR グループ」となり、日本専売公社も民営化（1985＝昭和 60 年）して「JT（日本たばこ産業株式会社）」となった（もう一つの公社であった日本電信電話公社は 1985 年に民営化して「NTT（日本電信電話株式会社）」となった）。また、日本サッカー界は、1991（平成 3）

年にプロリーグを設立し、「Jリーグ」と名づけた（1993＝平成5年から開幕）。

以下では、菊池の著書に記されている「J・ポップ」の楽曲について、その創作者たちについて検討する。ただし、1980年代末の楽曲は挙がっておらず、1990年代の楽曲から記載されている。なお、これまでは「レコード発売」について記してきたが、「1990年代に入ると、レコード会社は一斉にLPレコードの生産中止を宣言するに至った」（菊池前掲書、271頁）ような状況であるので、今後は「CD発売」という風に記述を変更することにする。

最初に挙がっているのは、「バブル経済の飽和状態を迎えていた」（菊池同書、278頁）1990年のヒット曲である。

① 「浪漫旅行」

（CD発売1990＝平成2年4月）

作詞・作曲・歌唱：米米 CLUB

ヴォーカル・石井竜也

（1959＝昭和34年9月22日生） 30歳

② 「おどるポンポコリン」

（CD発売1990＝平成2年4月）

作詞：さくらももこ

（1965＝昭和40年5月8日生） 24歳

作曲：織田哲郎

（1958＝昭和33年3月11日生） 32歳

歌唱：B・B クイーンズ

ヴォーカル・坪倉唯子

（1963＝昭和38年3月4日生） 27歳

①と②では、②の作詞家である漫画家のさくらももこだけが20代前半で最年少である。さくらももこは、テレビアニメでも人気の『ちびまる子ちゃん』の作者であり、②はそのテレビアニメのエンディングテーマ曲であった。

翌1991（平成3）年は、湾岸戦争が勃発し、ソ連が解体した年である。日本ではバブル経済の破綻の影響が現れる「失われた10年」の始まりの年であるが、人気のテレビ番組の主題歌が次々にヒットした年であった。次の3曲が代表的な楽曲である。③はバラエティ番組『邦ちゃんのやまだかつてないテレビ』のオープニング曲であり、④はドラマ『東京ラブストーリー』、⑤はドラマ『101回目のプロポーズ』の主題歌であった（②および③～⑤のいずれもフジテレビ系列で放映）。

③ 「愛は勝つ」

（CD発売1991＝平成3年1月）

（*注：菊池の著書ではこの曲のCD発売は「9月」となっているが、オリコンの資料では「1月」となっており、この曲が他のヒットの先駆けとなったことから、ここでは「1月」とした。）

作詞・作曲・歌唱：KAN（＝木村和 [カノ]）

（1962＝昭和37年9月24日生） 28歳

④ 「ラブ・ストーリーは突然に」

（CD発売1991＝平成3年2月）

作詞・作曲・歌唱：小田和正

（1947＝昭和22年9月20日生） 43歳

⑤ 「SAY YES」

（CD発売1991＝平成3年7月）

作詞・作曲：飛鳥 涼

（1958＝昭和33年2月24日生） 33歳

歌唱：CHAGE and ASKA

メインヴォーカル・飛鳥 涼

③～⑤の3曲についてみれば、作詞・作曲それにヴォーカルはそれぞれの楽曲で同一人物であり、29～43歳であって“若い”とは言えない。

その翌年の1992（平成4）年は、引続きテ

レビ主題歌ブームが見られた。以下の5曲はそのような楽曲である。⑥はNHK朝の連続テレビ小説『ひらり』, ⑦はフジテレビ系列の『愛という名のもとに』, ⑧はフジテレビ系列の『素顔のままで』, ⑨はTBS系列の『ずっとあなたが好きだった』, ⑩TBS系列の『ホームワーク』というドラマのそれぞれ主題歌である。

⑥「晴れたらいいね」

(CD 発売 1992=平成4年10月)

作詞・作曲：吉田美和

(1965=昭和40年5月6日生) 27歳

歌唱：DREAMS COME TRUE

ヴォーカル・吉田美和

⑦「悲しみは雪のように」

(CD 発売 1992=平成4年2月)

作詞・作曲・歌唱：浜田省吾

(1952=昭和27年12月29日生) 39歳

⑧「君がいるだけで」

(CD 発売 1992=平成4年5月)

作詞・作曲・歌唱：米米 CLUB

ヴォーカル・石井竜也

(1959=昭和34年9月22日生) 32歳

⑨「涙のキッス」

(CD 発売 1992=平成4年7月)

作詞・作曲：桑田佳祐

(1956=昭和31年2月26日生) 36歳

歌唱：サザンオールスターズ

ヴォーカル・桑田佳祐

⑩「クリスマスキャロルの頃には」

(CD 発売 1992=平成4年10月)

作詞：秋元 康

(1956=昭和31年5月2日生) 36歳

作曲：三井 誠

(1950=昭和25年10月6日生) 42歳

歌唱：稲垣潤一

(1953=昭和28年7月9日生) 39歳

テレビドラマは、少なくともこの時期には、業界で言うところの「F1層」(女性20~35歳)がメインターゲット(訴求の主対象)であった。その点では、⑥~⑩において(および①~⑤においても)、創作者自身がほぼその年齢層に属している。ただし、20代後半が大半であり、“とても若い”とは言い難い。これらの曲が主題歌とされたテレビドラマの多くは、いわゆる「トレンドイドラマ」であり、おしゃれな都会的ライフスタイルを持つ20~30代の登場人物が恋愛をすることが主たる内容であった。前稿でも述べたことであるが、恋愛に関する楽曲は、ある程度の精神的“成熟”がないと、良いものができないのかもしれない(水野2011年, 198頁)。

菊池の著書には、1993(平成5)年に発表された楽曲については記述が欠けている。この年の主なヒット曲を烏賀陽の著書から補う。以下の3曲(『オリコン年鑑』よりシングル年間ベスト3)が挙げられているが、いずれもテレビ番組の主題歌であった。⑪はフジテレビ系列のドラマ『振り返れば奴がいる』, ⑫は日本テレビ系列のドラマ『西遊記』, ⑬はTBS系列の情報番組『テレビ近未来研究所』のそれぞれ主題歌やエンディングテーマ曲であった(烏賀陽前掲書, 77頁)。

⑪「YAH YAH YAH」

(CD 発売 1993=平成5年3月)

作詞・作曲：飛鳥 涼

(1958=昭和33年2月24日生) 35歳

歌唱：CHAGE and ASKA

メインヴォーカル・飛鳥 涼

⑫ 「愛のままにわがままに

僕は君だけを傷つけない

(CD 発売 1993=平成 5 年 3 月)

作詞：稲葉浩志

(1964=昭和 39 年 9 月 23 日生) 28 歳

作曲：松本孝弘

(1961=昭和 36 年 3 月 27 日生) 32 歳

歌唱：B'z

ヴォーカル・稲葉浩志

⑬ 「ロード

(CD 発売 1993=平成 5 年 1 月)

作詞・作曲：高橋ジョージ

(1958=昭和 33 年 8 月 13 日生) 34 歳

歌唱：THE 虎舞竜

ヴォーカル・高橋ジョージ

⑪～⑬についても、創作者たちが、“とても若い”とは言えないであろう。

5 20 世紀末～21 世紀初頭

1990 年代の半ばは、テレビドラマ主題歌以外に、作曲家でプロデューサーでもある小室哲哉の作る楽曲が次々にヒットするという現象があった。20 世紀末でもあった 1990 年代の末には、浜崎あゆみと宇多田ヒカルという「歌姫」が登場してくる。これらの創作者を中心に、1990 年代半ばから 2000 年代の初頭までを見ていく（ここまでが、本稿でデータベースとした 2 冊の著書が扱っている範囲である）。

1994（平成 6）年は、「リレハンメルオリンピックの年だった」（菊池前掲書、291 頁）ということで、次の「オリンピックテーマ曲」（同）が取り上げられている。

① 「遥かな人へ

(CD 発売 1994=平成 6 年 2 月)

作詞：高橋真梨子

(1949=昭和 24 年 3 月 6 日生) 44 歳

作曲：織田哲郎

(1958=昭和 33 年 3 月 11 日生) 35 歳

歌唱：高橋真梨子

①の創作者 2 人は、すでにベテランの域に達していたと言えよう。

同じ 1994（平成 6）年のレコード大賞は、Mr.Children（愛称・ミスチル）の次の楽曲が大賞に輝いたが、ミスチルは J ポップのアーティストのなかでも代表的なバンドの一つであり、自作自演を旨とする「J ポップ」の台頭を印象づける受賞であったろう。

② 「イノセント・ワールド

(CD 発売 1994=平成 6 年 6 月)

作詞・作曲：桜井和寿

(1970=昭和 45 年 3 月 8 日生) 24 歳

歌唱：Mr.Children

ヴォーカル・桜井和寿

Mr.Children の存在は、事実上、桜井和寿自身の存在とイコールであるが、桜井はこの時点でまだ 20 代前半の“若い”アーティストであり、若者の人気は絶大であった。

1994～97（平成 6～9）年にかけては、作曲家でプロデューサーでもある小室哲哉の作る楽曲を歌う女性歌手がテレビを席巻した。その代表は安室奈美恵であった（他に、華原朋美、trf、globe らがいる）安室は、1995（平成 7）年から大晦日恒例の NHK『紅白歌合戦』に出場し、1997（平成 9）年には「紅白のトリを務めた」（菊池前掲書、291-2 頁）。そこで歌った次の楽曲はミリオン・セラーを記録した。

③ 「CAN YOU CELEBRATE?」

(CD 発売 1997=平成 9 年 2 月)

作詞・作曲：小室哲哉

(1958=昭和 33 年 11 月 27 日生) 38 歳

歌唱：安室奈美恵

(1977=昭和 52 年 9 月 20 日生) 19 歳

安室奈美恵は若い、この時期最大のヒットメーカーだった小室哲哉は 30 代後半で、“若い”とは言えない。安室は沖縄出身であったが、菊池は、彼女の「沖縄特有のエキゾチックな顔立ちは、沖縄音楽ブームを作り出した」(菊池同書, 292 頁)と述べている。この因果関係については疑問があるが、とにかく 1990 年代に「沖縄ブーム」があったことは確かであろう。その代表的な楽曲は次のものである。

④ 「島唄」

(CD 発売 1993=平成 5 年 6 月)

作詞・作曲：宮沢和史

(1966=昭和 41 年 1 月 18 日生) 27 歳

歌唱：ザ・ブーム

ヴォーカル：宮沢和史

④は、海外でもヒットしたという意味で、真に「J ポップ」にふさわしい楽曲であるが、創作者である宮沢和史は、“とても若い”年齢だったわけではない。

その後、日本語と英語の双方とも自由に操れる新世代の宇多田ヒカルが登場した。鳥賀陽は、宇多田のことを「J ポップが持つ「日本のポピュラー音楽が外国と肩を並べた」というファンタジー」を「もっとも的確に具現し、消費者の自己愛を満たす歌手」(鳥賀陽前掲書, 155 頁)と表現している。

⑤ 「ファースト・ラブ」

(CD 発売 1998=平成 10 年 4 月)

作詞・作曲・歌唱：宇多田ヒカル

(1983=昭和 58 年 1 月 19 日生) 15 歳

宇多田のこの楽曲を含むアルバム『ファースト・ラブ』は、765 万枚という驚異的なセールスを記録した(日本のレコード・CD 史上第一位)。この楽曲は、すべての作詞・作曲を 15 歳の宇多田が行っている。しかしながら、CD を購入したのが、宇多田と同じ“とても若い”世代が多かったかと言えば、おそらくそうではない。その楽曲が日本のリスナーにとって、大変新鮮に響いたことは確かであろうが、「彼女の母親は、1970 年代、政治の季節に敗れた若者の心を癒した藤圭子である」(菊池前掲書, 297 頁)というようなことがマスメディアで話題を呼び、金銭的な余裕のある中高年層が、アルバムを多数購入した可能性が高い。

6 結語

J ポップは、まさに「若者の音楽」というイメージが強いが、実際に創作者たちの年齢を検討してみると、一部を除いて、20 代後半～40 代の創作者たちが大部分であった。これまでの 2 回の論考(水野 2010 年および水野 2011 年)の場合と同様に、歌唱は若い歌手が担当している場合があるが、作詞や作曲の大半は中堅やベテランの域に達した創作者たちによるものだったと言える。例外的に、作詞・作曲をすべて手掛けた、“とても若い”宇多田ヒカルの場合は、若者の支持がとても高かったという証拠は必ずしもない。以上のことから、当初の仮説は支持されなかった、という結論を出してもおかしくないであろう。

<文 献>

水野博介「メディア文化論①若者はなぜポピュラー音楽が好きなのか？—（その1）諸仮説の提示と若干の検証—」『埼玉大学紀要 教養学部』第44巻第2号, 115-122頁, 2008年

水野博介「メディア文化論⑤若者はなぜポピュラー音楽が好きなのか？—（その5）日本における初期の「流行歌」の創作者たちは若者だったか？—」『埼玉大学紀要 教養学部』第46巻第2号, 197-204頁, 2010年

水野博介「メディア文化論⑥若者はなぜポピュラー音楽が好きなのか？—（その6）戦後日本のポピュラー音楽創作者たちは若者だったか？—」『埼玉大学紀要 教養学部』第47巻第1号, 193-203頁, 2011年

菊池清麿『日本流行歌変遷史 歌謡曲の誕生から J・ポップの時代へ』論創社, 2008年

鳥賀陽弘道『J ポップとは何か——巨大化する音楽産業——』岩波新書, 岩波書店, 2005年

< H P >

Oricon 『オリコン芸能人辞典』

www.oricon.co.jp/prof/guide.html#original